



Title	ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論：言語の「転位」
Author(s)	朝妻, 恵里子
Citation	スラヴ研究, 56, 197-213
Issue Date	2009
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/39232">http://hdl.handle.net/2115/39232</a>
Type	bulletin (article)
Note	研究ノート
File Information	56-008.pdf



[Instructions for use](#)

[研究ノート]

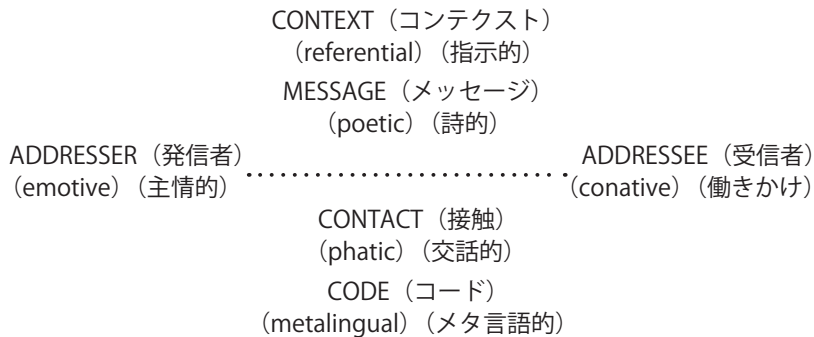
# ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論

—— 言語の「転位」 ——

朝 妻 恵里子

## 序

ロマン・ヤコブソン (1892–1982 年) は、1956 年の講演をもとにした論文「言語学と詩学」において、コミュニケーションの六機能図式を発表した。そこでは、コミュニケーションに不可欠な六つの因子——発信者、受信者、メッセージ、コンテキスト、コード、接触——を挙げ、その一つ一つに相異なる言語機能が対応していることを指摘し、以下のような図式化<sup>(1)</sup>を試みた。



たとえば、「ああ！」などの間投詞に代表されるような「主情的機能」は、話し手の驚きや悲しみを直接的にあらわす機能で、発信者自身に焦点があてられている。受信者に作用を及ぼすことを目標にする「働きかけ機能」は、命令法や呼格にみられる。発話された状況であるコンテキストに基づく「指示的機能」は、コミュニケーションにおいてもっとも支配的な機能である。ヤコブソンが指示対象とコンテキストを結びつけたのは、指示対象は必ず語られている状況、つまりコンテキストのなかでのみ明らかになり、コンテキストなくして指

\* 本稿のヤコブソンのテキストの引用訳出にあたってはすべて Roman Jakobson, *Selected Writings*, vols. 1–8 (Mouton, 1962–1988) を用い、既訳があるものに関しては参考にし、引用初出の際に所収されている邦訳文献を記載した。

1 Roman Jakobson, “Metalinguage as a Linguistic Problem,” in Roman Jakobson, *Selected Writings*, vol. 7 (Berlin: Mouton Publishers, 1985), p. 113 (*Selected Writings* は以下 *S. W.* と略記する) ; R. ヤコブソン (池上嘉彦・山中桂一訳) 『言語とメタ言語』勁草書房、1984 年、101–116 頁。1960 年の「言語学と詩学」よりも 1956 年の「言語学の問題としてのメタ言語」に記された図のほうが因子と機能の両方を示し、より詳細なため、後者から引用した。

示的機能が果たされることはないためである。ヤコブソンのこうしたコンテキスト重視の姿勢は、本稿で議論の中心的な位置を占めることになる。

以上の三機能はカール・ビューラーの「オルガノン・モデル」<sup>(2)</sup>ですでに明らかにされていた。ヤコブソンはこれらに加えてさらに三つの機能に関して論を展開する。「もしもし」や「ねえ、聞いている？」などのように、相手の注意をひいたり、注意の持続を促したりする「交話的機能」は、接触を確認するための機能である。発話の焦点がコードそのものにあてられているのは「メタ言語的機能」である。外国語学習や幼児の母語習得の際や、または「それはどういう意味ですか？」などと聞き手が話し手のコードを確認したりする際に広く用いられる機能である。最後に、「メッセージそのものへの志向」により表現を際立たせることを目的とするのは詩的機能である<sup>(3)</sup>。

この頃のヤコブソンは情報・通信理論に関心を寄せ、シャノンによる情報理論の用語を言語学のコミュニケーションモデルにとり入れたことはよく知られている。ヤコブソンは、簡略化した情報理論のモデルを援用し、あらゆるコミュニケーション行動に当てはまる普遍的な規則の抽出を求めたことなどから、批判を受けることになる。たとえば、複雑で多様なはずのコミュニケーションが線的な図式に収められ、双方向的な作用が無視されているという批判や、コミュニケーションを構成する話し手や聞き手といった主体や時間性を構造主義的方法論にしたがって排除しているといった批判である。

しかし、ヤコブソンは構造主義的な志向に則って、単にパロールの形式化や、コミュニケーション理論の単純化をめざしてこの図式を提唱したのではない。ヤコブソンは、1910年代にフッサールの現象学の影響を受け、言語の機能性に着目するようになり、ロシア・フォルマリズムやプラハ言語学サークルでその研究成果を発表する。この頃からヤコブソンは、話し手と聞き手の区別の重要性、実際の言語活動の多様性などを主張していた。やがて、話し手によるコード化と聞き手によるコード解読とのプロセスの違い、コードに基づいてメッセージの分析をおこなうこと、あるいはその逆からの分析に立脚したより明確なコミュニケーション論の構築をめざすことになった。

本稿では、第1節でヤコブソンがそもそもコードというものをどのように考えていたのか、また、コードは言語の機能の面においていかに作用するものと考えていたのかを検証することからはじめる。続いて、ヤコブソンのコード観が依拠していると考えられる言語の「近接性」(contiguity)という性質を取り上げる。ヤコブソンは言語を「差異」と「同一性」から捉えるのではなく、より柔軟な「近接性」という概念を持ち出し、コミュニケーションにおける言語の性質を明らかにしている。また、パースの考えていた「近接性」に関する見解、そしてヤコブソンを経由して現代言語人類学において継承された「近接性」の概念に基づく言語

---

2 カール・ビューラー(協阪豊ほか訳)『言語理論(上):言語の叙述機能』クロノス、1983年、27-38頁。

3 ロシアの言語学者ヤクビンスキイ(1892-1945年)が1916年に論文「詩的言語の音について」において実用言語と詩的言語をはじめ理論的に区別したのを受け、ヤコブソンは「最新ロシア詩」(Roman Jakobson, “Новейшая русская поэзия,” in *S. W.*, vol. 5 (The Hague: Mouton Publishers, 1979), pp. 299-354)において実用言語、詩的言語、主情的言語の三分類をすでに試みていた。

理論とも比較検証する。第2節では、言語の主体である話し手と聞き手の問題に焦点をあてる。ヤコブソンは話し手と聞き手の役割の違いに着目し、とりわけ聞き手の立場を重視している。しかし、ヤコブソンにとってコミュニケーションに参加する主体とは絶対的、あるいは普遍的に想定されるものではなく、かつ言語分析から消去すべきものでもない。ヤコブソンの言語論、詩論のテキストから主体に関する独自の見解を明らかにする。最後の結論部では、本稿で明らかにしたヤコブソンのコミュニケーションに関する見解と、ヤコブソンの言語論に全般的に共通して見られる言語の「全体性」という考えかたとを関連づけてみる。

## 1. 言語における「転位」の作用

### 1-1. コードの多様性

そもそも、六機能図式に基づいて受信者が発信者のコードの解読に成功さえすれば、コミュニケーションは成り立つとヤコブソンは考えていたのだろうか。話し手のコード化と聞き手のコード解読の過程において、話し手は自身の伝えたいことを言語記号に移し変え、聞き手はその記号を自分の理解できる記号へと翻訳するように置き換えるだけで、コミュニケーションはおこなわれていると考えていたのだろうか。

もちろん、ヤコブソンは話し手と聞き手による意味生成のプロセスを機械的な操作で片づけていたのではない。まず第一に、ヤコブソンは一つの言語内のあらゆる話し手にとって均質な普遍的コードの存在を想定していたわけではない。上記の六機能図式ではコードが一つのものであるように示されているが、実際には複数の下位コードが存在することにヤコブソンはたびたび言及している。

どの言語共同体、どの話し手にとっても、一つの言語の統一体が存在するが、この包括的コードはいくつかの互いに連結しあう下位コードの体系をなしている<sup>(4)</sup>。

一つに数えられる言語には地域、性、階級などの違いによって社会的に異なるコードが多く存在する。またどの話し手も、おかれた状況や心理状態などによって異なる個人的なコードをいくつも持ち合わせている。話し手は、社会的な立場からコードを使い分けだけでなく、個人的な嗜好からときには社会的規範を超えてイントネーションや語義などを変容しながら自身のスタイルをつくっている。言語の使用者は、個々の状況に応じて持ち合わせのさまざまなコードを変換させながら、コミュニケーションを成立させているのである。

個人がそれぞれ複数の社会的・個人的コードを有してそれらを多様に使い分けているのであれば、話し手と聞き手のコードが完全に一致するのは稀なことである。そのため、話し手は聞き手のコードを推測し、「相手のように話そうという志向<sup>(5)</sup>」に基づいて、聞き手に自

4 Roman Jakobson, "Linguistics and Poetics," in *S. W.*, vol. 3 (The Hague: Mouton Publishers, 1981), p. 21; ロマン・ヤコブソン (川本茂雄監修、田村すゞ子、村崎恭子、長嶋善郎、中野直子訳) 『一般言語学』みすず書房、1973年、183-224頁。

5 Roman Jakobson, "Sur la théorie des affinités phonologiques entre les langues," in *S. W.*, vol. 1, 2nd, expanded ed. (The Hague: Mouton Publishers, 1971), p. 236; ロマン・ヤコブソン (服

分を順応させながら相互理解を得ようとしている。ヤコブソンは、コミュニケーションは異なるコードを有するもの同士が作り上げていくものと考えていた。コミュニケーションにおいて誤解が生じたり、相互の理解に多少のずれが生じたりして首尾よくいかないのは当然のことという前提があった。

ちなみにヤコブソンが「コード」という術語を用いたのは、ソシュールが『一般言語学講義』(以下『講義』と略記)において見いだした「ラング」と区別するためである。ソシュールは「静的で単一の体系」としてどの話し手にとっても一様な「ラング」という概念をつくりだしたが<sup>(6)</sup>、ヤコブソンは社会的あるいは個人的な種々のヴァリエントを下位コードとし、それらが階層的に体系をなすものとして「コード」という概念を考えたのである。

またヤコブソンはコードだけではなく、機能の多層性も強調している。六機能図式では六つの機能の個別的なはたらきだけがあらわされているが、実際、ヤコブソンはほかの論文で複数の機能の重なり合いを強調している。

言語の六つの基本的な相を区別しても、ただ一つの機能しか果たさないような言語のメッセージを発見することはまず不可能であろう。多様性は、これらの機能のいずれか一つの独占にあるのではなく、それらの異なる階層的順序にある<sup>(7)</sup>。

すなわち、ある支配的な機能が作用している場合、ほかの機能ははたらいていないのではなく、「あいまい」になっているにすぎない。詩においてさえ、詩的機能だけが作用しているわけではない。たとえば、叙事詩では三人称が多く用いられることから、指示的機能がたびたび発揮され、叙情詩では一人称が中心にあるために、主情的機能が頻繁にあらわれる<sup>(8)</sup>。またもちろん、詩的機能は詩にのみあらわれるものではない。「演説者の演説、日常会話、新聞記事、広告、科学論文など<sup>(9)</sup>」すべてにあらわれうる。たとえば、指示的機能が優勢な the horrible Harry という文で、dreadful でも terrible でも frightful でもなく horrible が用いられるのは、類音法 (paronomasia) という詩的手法を無意識的に採用しているためである<sup>(10)</sup>。指示的機能においても詩的機能が二次的ではあるが重要な役目を果たしている。

このように、対極にある機能と考えられる詩的機能と指示的機能でさえもさまざまな言語活動のなかでいろいろな程度でからみ合っている。複数の機能が重なり合うなかで、言語活

---

部四郎編、早田輝洋、長嶋善郎、米重文樹訳)『ロマン・ヤーコブソン選集 1 言語の分析』大修館書店、1986年、39-54頁。

6 Roman Jakobson, "Linguistics in Its Relation to Other Sciences," in *S. W.*, vol. 2 (The Hague: Mouton Publishers, 1971), p. 668; ロマン・ヤーコブソン (服部四郎編、早田輝洋、長嶋善郎、米重文樹訳)『ロマン・ヤーコブソン選集 2 言語と言語科学』大修館書店、1978年、149-227頁。

7 Jakobson, "Linguistics and Poetics," p. 22.

8 Ibid., p. 26.

9 Roman Jakobson, "The Dominant," in *S. W.*, vol. 3, pp. 752-753; ロマン・ヤーコブソン (川本茂雄編、川本茂雄、千野栄一監訳)『ロマン・ヤーコブソン選集 3 詩学』大修館書店、1985年、43-48頁。

10 Jakobson, "Linguistics and Poetics," p. 26.

動は全体として支配的機能に従属している。こうした支配的機能をヤコブソンは「ドミナント」と名づけている。

ヤコブソンは、コミュニケーションにおいて話し手と聞き手が複数のコードを効果的に変換し、かつ状況に応じて複数の言語機能を折り重ねながら作用させる点に着目し、「動態、すなわち、言語の全体の内部における下位コードの相互作用が、言語学の共時性の枢要な問題<sup>(11)</sup>」として言語の動的な階層構造を主張しているのである。

## 1-2. 結合—近接性—メトニミー

それでは、多様なコードが重なり合いながら階層構造をなすという複雑なコミュニケーションモデルにおいて、話し手と聞き手はどのように相互理解を可能にしているのか。ヤコブソンによれば、コミュニケーション成立の鍵となっているのは、言語の「近接性」という性質を利用することにある。

話すという出来事の参加者たちの間には、メッセージの伝達を確実にするための何らかの近接性がなければならない。発信者と受信者の二人が、空間的に、あるいはしばしば時間的に離れていても、その二人の間は内的関係によって乗り越えられる<sup>(12)</sup>。

ヤコブソンの著作においてこの「近接性」という語はたびたび登場するが、この「近接性」とはいったい何を意味するのだろうか。まず、ヤコブソンが「近接性」という術語を用いるケースをみてみよう。もっとも一般的なのは、言語使用における二つの基本的な言語操作として「結合」と「選択」の概念を取り出すときである。ヤコブソンによれば、「結合」は「近接性」の原理に基づき、「選択」は「類似性」の原理——類似と相違、同義性と反意性——に基づく。たとえば、話し手がある「子」を話題にすると、child、kid、youngster、totといった類似の単語のなかから一つを選択する。この話題について語るために、sleeps、dozes、nods、napsといった意味的に類似する動詞のなかから一つを選択する。選択された二語は結合してメッセージをなす<sup>(13)</sup>。このメッセージの生成プロセスにあらわれる「選択」と「結合」を、ヤコブソンは「言語分析の本質的な二分法」として重視している。

ヤコブソンが取り出した「選択」と「結合」という言語の配列様式は、ソシュールが『講義』において語の異なる二つの存在様式として「連合」・「連辞」を挙げたことを受けている<sup>(14)</sup>。

11 Roman Jakobson, "Typological Studies and Their Contribution to Historical Comparative Linguistics," in *S. W.*, vol. 1, p. 530; ヤコブソン『一般言語学』45-55頁。

12 Roman Jakobson, "Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances," in *S. W.*, vol. 2, p. 244; ヤコブソン『一般言語学』21-44頁。

13 Jakobson, "Linguistics and Poetics," p. 27.

14 ポーランドの言語学者クルシェフスキが1883年の論文(クルシェフスキ *Н.В. Избранные работы по языкознанию*, М., 1998. С. 145.)で「類似性に基づく連合」と「近接性に基づく連合」とを区別したのが最初である。また、ホーレンシュタインによれば、クルシェフスキもヤコブソンも連辞的結合の操作に「近接性」の原理を含めて考えているのに対して、ソシュールはこの見解に「近接性」の概念を入れていないという。ホーレンシュタイン(平井正、菊池武弘、菊池雅子訳)『言語学・記号学・解釈学』勁草書房、1987年、99頁。

ソシュールは、前者を記憶によって形成された潜在系列に存在するものとし、後者を言語形式として実際に表出する顕在的系列のものと考えた。ヤコブソンはソシュールのこの見解を支持し、選択はメッセージではなく、コードのなかに存在し、結合はコードとメッセージの両方、または実際のメッセージのなかにおいてのみ存在するとより明確に言い換えている<sup>(15)</sup>。

しかし、ヤコブソンはソシュールのこうした見解を単に踏襲するだけでなく、さらに展開させる。修辞学の伝統的な概念である「メタファー」と「メトニミー」のなかに、言語使用における選択・結合の操作と共通する相を見いだすのである。すなわち、メタファーは類似性に基づく表現方法であり、メトニミーは近接性に基づく表現方法であることから、メタファーとメトニミーも言語の使用の際にあらわれる基本的な二つの軸と考えた。

コード	選択	類似性	メタファー
メッセージ	結合	隣接性	メトニミー

ヤコブソンは1933年の「映画は衰退しているのだろうか」、1935年の「詩人パステルナークの散文に関する覚書」において、「メタファー」と「メトニミー」という語を使いはじめ、映画の構成においても詩の構成においても、基本的な二軸となるものとしてメタファーとメトニミーを挙げている<sup>(16)</sup>。1956年には論文「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」で、言語の選択・結合の二つの軸をメタファー・メトニミーとに明確に結びつけている。

ヤコブソンが言語論にメタファーとメトニミーを持ち出してきた理由の一つに、言語の「転位 (transfer)」の性質に着眼していたことが挙げられる。ヤコブソンは、すでに1910年代から30年代にかけてのモスクワやプラハにおけるロシア・フォルマリズムの活動などで、言語のこうした性質に関心を示している。よく知られているように、ヤコブソンは文学作品における言語形式をごくありふれた用法ではなく非日常的な用法によって際立たせる、いわゆる「異化」作用に関心を寄せていた。自身も「ザーウミ (超意味言語)」を駆使して詩の創作をおこなっていたほどである。ヤコブソンは「詩の比喩の本質は、単に物と物との多様な関係の記入ばかりでなく、通常関係を転位することにある<sup>(17)</sup>」と「転位 (ここではド

15 Jakobson, "Two Aspects of Language," p. 243.

ポール・リクールはヤコブソンのこの見解を批判している。文脈のなかで創造された結合と、コード内であらかじめつくられていた結合とは区別しなければならず、自由な選択が行われるときに生じる前者の結合にとりわけ注目しなければならないことを強調している。ポール・リクール (久米博訳) 『生きた隠喩』岩波書店、1984年、236頁。

16 ヤコブソンは映画や詩のほか、絵画などの記号にもメタファーとメトニミーの作用を見いだしている。たとえば、絵画におけるキュビズムの画家は対象物が喩の集合へと変換されるメトニミー的な手法に則っており、シュルレアリスムの画家は「明らかにメタファー的な姿勢」をとっている (Jakobson, "Two Aspects of Language," p. 256)。ヤコブソンは「メトニミーとメタファーの両手法の間の拮抗は、個人的であれ社会的であれ、どの記号過程にも明らかにみられる (Jakobson, "Two Aspects of Language," p. 258)」と指摘し、人間の思考活動全般にこの二つの軸がはたらいている可能性を示唆していた。

17 Roman Jakobson, "Randbemerkungen zur Prosa des Dichters Pasternak," in *S. W.*, vol. 5, p. 425 ; ヤコブソン『ロマン・ヤコブソン選集 3 詩学』49-67頁。

イツ語 “Verschiebung”)」を重要視し、なかでも部分－全体（あるいは全体－部分）の関係、原因－結果（あるいは結果－原因）の關係にみられる内的近接と、時間的・空間的近接とに基づく転位であるメトニミーに注目している<sup>(18)</sup>。

### 1-3. 「指標性」としての「近接性」

ここでヤコブソンが用いた「近接性」という術語が、どこから持ち出され、ヤコブソン以後どのように展開されたかを簡単にみておく。ヤコブソンの言語の「近接性」という概念をさかのぼれば、それはパースに由来するとされる<sup>(19)</sup>。パースは記号学における三分類として、「指標」、「類像」、「象徴」を挙げ、「指標」は記号と対象とが実際に結びついている「近接性」に、「類像」は記号と対象との「類似性」に、「象徴」は記号と対象とが約束や習慣などの取り決めに基づく原理としている。パースの考える「近接性」に基づく「指標」的な記号といえ、記号が対象と事実的に連結しており、対象から実際に影響を受けることによってその対象の記号となるものをいう<sup>(20)</sup>。言語記号に関しては、「ダイクシス」と呼ばれる人称代名詞や指示詞などが代表的な指標記号である。パースは言語記号によるコミュニケーション活動において、現実世界の具体的な事物と経験のレベルで結びつけることのできる記号の「指標性」を重視している。したがって、パースの考える言語記号の「近接性」は、コンテクスト上の時間と空間の物理的な近接関係や因果関係を意味している。

ヤコブソンは、自身の論文のなかでたびたびパースについて言及し、パースの独創性と斬新さを評価し、また自身に関しても「パースの著作を役立たせた最初の言語学者<sup>(21)</sup>」と自負している。しかし、ヤコブソンは「近接性」という語をパースから援用したとしても、それが従来指摘されてきたように、「指標性」に依拠しているという点までパースに準じているかどうかは一考する必要がある。というのも、プラス<sup>(22)</sup>、山中<sup>(23)</sup>の指摘にあるように、ヤコブソンのパース解釈には誤解、あるいは曲解が見うけられる。ヤコブソンのパース理解は以下の引用に端的にあらわれている。

パースの意見では、「自然な分類は二分法で行われ」、「あらゆる組み合わせには二項の要素がある」。「二項性は一つに合わさった二つの対象からなり」、パースは当面の探求を「記号の必然的な諸形

18 本稿ではヤコブソンの見解にしたがって、メトニミーに限定して論を進めることにする。

19 Alessandro Duranti, *Linguistic Anthropology* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 17–37; KOYAMA Wataru, “Anthropology and Pragmatics,” in Keith Brown et al., eds., *Encyclopedia of Language and Linguistics*, 2nd ed., vol. 1 (Oxford: Elsevier, 2005), pp. 307–308.

記号の「指標性」と結びついた「近接性」に限定すればパースにさかのぼるが、すでに18世紀に経験論においてヒュームが用い、以後、人類学でフレイザー、言語学ではクルシェフスキが「近接性」の概念を用いている（注14参照）。

20 米盛裕二『パースの記号学』勁草書房、1981年、153–154頁。

21 Roman Jakobson, “A Few Remarks on Peirce,” in *S. W.*, vol. 7, p. 251; ヤコブソン『言語とメタ言語』43–54頁。

22 Elizabeth W. Bruss, “Peirce and Jakobson on the Nature of Sign,” in R. W. Bailey et al., eds., *The Sign: Semiotics around the World* (Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, 1978), pp. 81–82.

23 山中桂一「現代記号論におけるロマン・ヤコブソンの位置」『理想』608号、1984年、149頁。



式における二項性の考察」と特徴づけている。かれは形式的、文法的な構造の言語を「関係的な二項性」の体系としてみている。パースにとって、もっとも基本的な二項関係は対立である<sup>(24)</sup>。

ヤコブソンはパースによる記号の三分法を「近接性」と「類似性」との二分法に基づくものと解釈している。プラスによる「自身の見解に付加的な支持を得るためにパースを利用した<sup>(25)</sup>」という指摘はこの点において妥当であろう。

また、この「近接性」という概念は、パース、ヤコブソンを経て、現代言語人類学において、とりわけ言語の「指標性」に重点をおいたコミュニケーション論に生かされている。たとえばデル・ハイムズは、ヤコブソンの六機能図式における六つの因子をより精密化し、八つの発話の要素を見出し、それらの頭文字をとって **SPEAKING** として提示した。すなわち、**Situation** [状況] (時間や場所などの物理的状況、心理的状況)、**Participants** [参加者] (話し手、聞き手など)、**Ends** [目的]、**Act sequence** [連鎖行為]、**Key** [基調] (声のトーンや調音などの調子)、**Instrumentalities** [手段] (口頭、文字などのコミュニケーション媒体、発話形式)、**Norms** [規範] (相互作用や解釈における規範)、**Genre** [ジャンル] (詩、物語、祈り、演説、講義などの範疇) の八要素である<sup>(26)</sup>。これに依拠してハイムズは、言語が使用されているそのコンテキストに基づいて、言語活動を社会文化的な「スピーチ・イベント」としてコミュニケーション活動全体で捉えることを可能にした。

またハイムズと同じくヤコブソンの見解を継承しているマイケル・シルヴァスティンは、コミュニケーションを「いま・ここ」、つまり「オリゴ (ラテン語で **origo**)」の視点からコンテキスト化する「スピーチ・イベント」として概念化した。たとえば、話し手と聞き手がコミュニケーションをおこなっている「いま・ここ」には、話し手と聞き手の社会的な立場の違い、性差、見解の違いなど様々な社会文化的な相違が含まれている。要するに、こうしたコミュニケーションには、言語の言及指示的な機能のほかに、「非言及指示的」、つまり社会文化的な要素の指示機能が含まれているということである。アメリカン・インディアン言語の一つコアサティ語には、女性に発話された動詞には接尾辞 **-s** が付与される。この接尾辞 **-s** はあろうとなかろうと、コミュニケーションにおいて、指示された内容上の価値は何も変わらない。つまり、接尾辞 **-s** は何かの指示内容を明示する役割を果たしているのではなく、発話者の性別に関する情報を提供している<sup>(27)</sup>。

ちなみに、シルヴァスティンは文法においても、文法的な指標が社会文化的な意味を獲得しながらスピーチ・イベントとなる過程を明らかにし、1970年代には名詞句と格標示の関

---

24 Jakobson, "A Few Remarks," p. 251.

25 Bruss, "Peirce and Jakobson on the Nature of Sign," p. 81.

26 Dell Hymes, "Models of the Interaction of Language and Social Life," in John Gumperz and Dell Hymes, eds., *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication* (New York: Basil Blackwell, 1986), pp. 59-65.

27 Michael Silverstein, "Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description," in Keith H. Basso and Henry A. Selby, eds., *Meaning in Anthropology* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1976), p. 30.

係性を示しうる「名詞句階層」の存在を見いだした<sup>(28)</sup>。名詞句階層とは、一人称代名詞、二人称代名詞からはじまり、指示代名詞、固有名詞、親族名詞、人間名詞、動物名詞などというように、名詞を指標性の高いものから低いものへと段階的に階層化したものである。シルヴァスティンは文法も「いま・ここ」に位置する指標性を基点としていることを強調している<sup>(29)</sup>。

このように、パースとそれを受け継いだ現代の言語人類学における「近接性」の概念は、言語の指標的な性質に依拠したものである。これに対してヤコブソンは、言語にそのような指標的な作用を見いだすために「近接性」の概念を持ち出したのであろうか。あるいはこれらとは異なる視点から想定したものなのであろうか。

#### 1-4. 「転位」としての「近接性」——「同一性から近接性への逃避」——

そもそもヤコブソンは、パースによる記号そのものの分類に大きな関心を寄せたわけではない。ヤコブソンが得たパースからの「もっとも適切かつ輝かしい着想のひとつ」は、この記号の分類ではなく、「意味とは“ある記号の、ほかの記号体系への翻訳である”<sup>(30)</sup>」という定義である。いいかえれば、もとの記号がより高い明示性をもった記号へと展開されることである。コミュニケーションにおいては、記号の組み合わせによって、より明示的なメッセージが生成される。

しかし、この「翻訳」に際して、もとの記号と交替された記号は完全に等価的なものにはなりえない。前述したように、ヤコブソンは詩における言語の転位の性質に注目していたが、転位は同様に日常の言語使用においてもつねに起こっているという考えをもっていた。話し手は意味したいことを言語記号に完全に言い換えることはできず、その近接において表現している。話し手は、自身のコードを聞き手のコードに合わせなければならなかったり、適切な語を見つけられずに意味したいことを表現しきれなかったり、あるいは故意にすべてを言い尽くさなかったりと、自由にコード化できるわけではない。そのため、意味したい対象からその近接物へと視点をずらすことによって表現を可能とし、このとき必ず意味の転位を生みだしている。ヤコブソンの考えでは、このずらしが表現に豊かな幅をもたらす。「意味の可変性、その多様で広域に及ぶ比喩的転位、さまざまな言い換えに対するはかり知れない適応力は、自然言語の創造性を誘発」するもので、「自然言語の特性」であると述べている<sup>(31)</sup>。

一方、聞き手は話し手によってずらされた意味を知覚するのだが、ずらされた意味をそのまま自分のコード内の記号に変換して理解するのはなく、聞き手もあいまいなレベルで意味を解釈する。つまり、聞き手は受け取ったメッセージを個々の記号単位に「完全な等価性」

28 シルヴァスティンの見解によれば、名詞句階層の上方に定められる名詞句は主格・対格型格標示を、下部に位置する名詞句は能格・絶対格型格標示を明示するという。Michael Silverstein, “Hierarchy of Features and Ergativity,” in M. W. Robert Dixon, ed., *Grammatical Categories in Australian Languages* (Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, 1976), p.113.

29 ハイムズやシルヴァスティンをはじめとする言語人類学的な研究の流れは、小山亘『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』三元社、2008年で詳細に述べられている。

30 Jakobson, “A Few Remarks,” p. 251.

31 Jakobson, “Linguistics in Its Relation” p. 659.

に基づいて置き換えるのではなく、「メッセージ全体」に置き換えることで理解している<sup>(32)</sup>。

したがってヤコブソンの考えでは、言語記号におけるシニフィアンとシニフィエは表裏一体の結合物ではない。とりわけコミュニケーションにおいて交換される記号は、話し手と聞き手のあいだで完全にコード化されたものではなく、発話されるごとに生成され、その場限りの意味を有するものである。ソシュールが言語記号には同一性と差異以外に何もないと考えたのに対し、ヤコブソンは言語記号に「同一性が不十分なもの」を見いだしている。「記号と対象との同一性（A は A<sub>1</sub> である）が直接的に自覚されるのと同時に、その同一性が不十分なものである（A は A<sub>1</sub> ではない）という直接的な自覚もまた必要<sup>(33)</sup>」であるとし、つまりは言語記号に備わる「近接性」を強調している。

話し手も聞き手も言語記号の同一性に基づいて語り、理解しているのではなく、近接性に依拠して言語を用いる。いわば「同一性から近接性への逃避<sup>(34)</sup>」によって、話し手も聞き手も現実世界と結びつくことができる。またコミュニケーションにおいて、しばしば誤解が生じて相互理解に至らないのは、話し手も聞き手も言語の近接性に基づいてコード化・コード解読をおこなっているためである。

ところでポール・リクールは、ヤコブソンの著作の「記号の意味とは、それを翻訳するもう一つの記号である。……いずれの場合でも、われわれは記号を記号に代置する」という箇所を引いて、ヤコブソンが言語の意味的な相を代置に還元していると批判している<sup>(35)</sup>。しかし、以上のことからヤコブソンが意味生成プロセスを単純に「代置」の装置で説明しているとはいえないことは明らかであろう<sup>(36)</sup>。

## 2. 語る主体と聞く主体

### 2-1. 聞く主体

ヤコブソンのコミュニケーション論では、言語そのものにもみ焦点をあてるのではなく、言語以外の因子にも関心が払われていることは六機能図式からも明らかである。なかでも、言語の主体である発信者（話し手）と受信者（聞き手）に着目し、双方の役割の違いに基づいて言語分析をおこなった点は意義深い。

前述したように、話し手は語を選択する過程で自分の好みの語をいつでも自由に選べるわけではない。聞き手に話が通じるように「自分と話し相手が共有している語彙の貯蔵庫」か

---

32 Roman Jakobson, "On Linguistic Aspects of Translation," in *S. W.*, vol 2, p. 262; ヤコブソン『一般言語学』45-55頁。

33 Roman Jakobson, "What is Poetry?" in *S. W.*, vol. 3, p. 750; ヤコブソン『ロマン・ヤコブソン選集3 詩学』27-42頁。

34 Jakobson, "Two Aspects of Language," p. 250.

35 リクール『生きた隠喩』235頁。なお、ヤコブソンの引用は Jakobson, "The Conference of Anthropologists and Linguists," in *S. W.*, vol. 2, p. 566.

36 この点に関して、リクールの見解を全般的に支持している坂部も、ヤコブソンは「単純なく置き換え説」の信奉者と見なされるべきでなく、「発話の文脈のうちにおける言語単位の相互のはたらきによって新たな意味や意味の転移・偏差が成立すると見る〈相互作用説〉」を展開する立場にあるとしている。坂部恵『かたり』弘文堂、1990年、141-142頁。

ら語を選ばなくてはならない。「わかる？」などと相手のコードを探りつつ、語を選択する。語の選択に際して、話し手は自分の意志に基づくのではなく、「相手を喜ばせようとするために、またはただわかってもらうために、あるいはまた相手に認めてもらうために聞き手の用語を使う<sup>(37)</sup>」のである。ヤコブソンはこの点において、「話し手は語の選択において完全に自由な行為者ではない<sup>(38)</sup>」と話し手の不自由さを指摘している。そのため、話し手は意味したいことを言語記号に言い換えるとき、自身の言いたいことを完全に記号に移しかえることはできず、その近接において表現しているのである。意味したい対象からその近接物へと視点をずらすことによって表現を可能とし、このとき必ず意味の転位を生みだしている。

一方、聞き手も話し手のコードをただ翻訳すれば良いだけではない。ヤコブソンの考えでは、聞き手には話し手以上の能力が要求される。すなわち、聞き手が語を意識するのは、それを構成する諸単位がすでに話し手に発音されたときであり、文を意識するのはそれを構成する語がすでに述べられたときである。たとえば、話し手が /sən/ と発するとき、sun「太陽」と son「息子」のどちらを意味しているのかを、話し手は前もって知っているのに対して、聞き手はコンテクストに依拠して意味を推測するしかない<sup>(39)</sup>。話し手は語りたい意味内容をはじめから有して、それを音にしていく「意味から音へ」（あるいは descendant operation）の過程をたどるが、聞き手は話し手の発したことを再構成し、「語における音、文における語、発話全体における文を次々により大きな全体にしてまとめる過程」をたどらなければならない。こうした「音から意味へ」（あるいは ascendant operation<sup>(40)</sup>）の過程で、聞き手は語られている意味を推量することしかできない。

発話を生産する際には、直接構成要素への焦点合わせが先行するのに対し、発話を知覚する際には、メッセージは**まず第一に**推測の過程にある。……発信者には何のあいまい性もないのに、受信者にはメッセージは多くのあいまい性を含んでいる<sup>(41)</sup>。

聞き手は受け取ったメッセージを「完全な等価性」に基づいて個々の記号単位に翻訳するのではなく、「メッセージ全体」に置き換えることで理解している<sup>(42)</sup>。ヤコブソンは「聞き手としての個人のより広い能力と、話し手としてのより狭い能力<sup>(43)</sup>」とを区別し検討することを重視している。聞き手はメッセージの受動的な理解者でなく、能動的な意味解釈者であり、意味を決定するのは話し手ではなく聞き手である。「語る主体」の意識から出発したソシユールに対して、ヤコブソンはコミュニケーションにおける聞き手の役割を重視する、

37 Jakobson, "Two Aspects of Language," p. 248.

38 Ibid., p. 241.

39 Roman Jakobson, "Linguistics and the Theory of Communication," in *S. W.*, vol. 2, pp. 575–576 ; ヤーコブソン『一般言語学』65–76頁。

40 Roman Jakobson, "Results of the Ninth International Congress of Linguists," in *S. W.*, vol. 2, p. 600.

41 Jakobson, "Linguistics and the Theory," pp. 575–576.

42 Jakobson, "On Linguistic Aspects," p. 262.

43 Jakobson, "Linguistics in Its Relation," p. 668.

いわば「聞く主体」に注目していた。

## 2-2. 聞く主体と知覚

こうしたヤコブソンの聞き手に着目する言語観は、かれの代表的な音韻理論である弁別素性に関する見解の土台となっており、あらわれている。ヤコブソンは、話し手による言語の産出 (production) と、聞き手による言語の知覚 (perception) といった作用の違いを峻別している。たとえば、コーカサス地方に住むロシア人は、声門閉鎖音のようなコーカサス語によくみられる音素を自分で発音はできなくても、耳でそうした音素を識別することはできるという。英語を母語としない話者が、英語の歯間音の聞き分けはできるのに、自身で再産出ができないのも同じ現象であり、言語の産出と知覚のたどるプロセスの違いをあらわしている。しかし、ある音の産出は可能で知覚ができないという逆のケースがほとんどありえないのは、言語が「聞かれるために話し、理解されるために聞かれるという明白な事実<sup>(44)</sup>」に基づいているためであるとヤコブソンは考えている。

こうした考えから音素を分析する際に、話し手による調音の観点からだけではなく、聞き手によって知覚された音として、弁別素性を抽出する方法論を主張している。

いかなる<sup>スピーチ・イベント</sup>発話出来事における<sup>モーター・ステージ</sup>産出段階の聴覚的な現象に対する関係も、手段の結果に対する関係に等しいので、生成的な不変性の聴覚レベルへの作用よりも、聴覚レベルの関係のほうが生成的な不変性により効果的な鍵を与えるようだ。どの素性も産出レベルよりも聴覚レベルにおいてははるかにはっきりとした選択肢の対立をあらわす。そのため、何の聴覚的な一致もなしに調音的な相関性に基づいて弁別素性表をつくれれば、当然、不正確で不確定の未完成な作品のままである<sup>(45)</sup>。

話し手による発話の意味区別 (sense-discrimination) だけでなく、聞き手による意味決定 (sense determination) のプロセスをも弁別素性の特定の際の分析対象に含めることは、ヤコブソンが目的論的な立場に依拠していることとかわってくる。コミュニケーションにおいて話し手の目的は単に言語を産出することではなく、いつも聞き手に理解されることにあるのだから、「音に関する問題の目的論的な考えでは、発話の生理学と比較して聴覚上の分析の関連性が増大する<sup>(46)</sup>」。

ちなみにこの聴覚面を言語分析に取り入れることはソシュールにはじまるが、ヤコブソンはこの考えを言語記号や音素に関する分析の土台にするだけに留まらず、さらに発展させている。言語の「聞く」はたらきを重視することは、言語を何よりもコミュニケーションの手段と考える姿勢と一致し、ヤコブソンがロシア・フォルマリズム、あるいはプラハ言語学サークル時代から一貫して主張していた言語の機能主義の見解に通じる。

---

44 Roman Jakobson and Morris Halle, *Fundamentals of Language* (The Hague: Mouton, 1956), p. 47.

45 Roman Jakobson, "The Role of Phonic Elements in Speech Perception," in *S. W.*, vol. 1, p. 715.

46 Roman Jakobson, "The Concept of the Sound Law and the Teleological Criterion," in *S. W.*, vol. 1, p. 2.

### 2-3. 主体（詩中の「わたし」）の後退

ヤコブソンが、語る主体よりも聞く主体を重んじる姿勢は、文学作品におけるメタファー・メトニミーの表現に関する見解からもうかがえる。

前述の論文「詩人パステルナークの散文に関する覚書」でヤコブソンは、マヤコフスキイをメタファー的表現に、パステルナークをメトニミー的表現に優れた詩人として区別している<sup>(47)</sup>。ヤコブソンによれば、マヤコフスキイの作品では、類似や対立に基づく独創的なメタファーの手法を用いることで詩人のイメージ世界が広げられている。その際、イメージをつくる原動力となっているのが詩人の一人称「わたし」であり、「わたし」の視点から外界の対象や状況などを眺め、「わたし」の衝動によってまわりのすべてが調和し、その衝動がほかのさまざまな面に移し変えられ、最終的にそれらを融合すると述べている<sup>(48)</sup>。要するに、マヤコフスキイに代表されるメタファー表現に満ちた詩において特徴的なのは、一人称「わたし」が前面に出され、題材やまわりの状況などは一人称「わたし」の付属物にすぎないという点である。

これに対してパステルナークの詩や散文においては、近接連合に基づいたメトニミー的な表現が駆使されている。メタファーに立脚した表現と対照的に、「周囲のイメージは詩人の『わたし』の近接的反映として機能し、メトニミー的表現として機能する<sup>(49)</sup>」。主人公にかわって、しばしば周りの物が暴動を起こしたり、喜びを表現したりする。「行為者にかわって動作を転嫁し、状況や意見や特徴をそれらの所有者にかわって転嫁すること<sup>(50)</sup>」で、一人称は背景に押しやられる。たとえば、「駅、そしてモスクワが……土手に沿ってゆらゆらと揺れていた」というパステルナークの一文で、実際には観察者である「わたし」が動いている電車のなかにいるのだが、視点がずらされ、「わたし」は影を潜めている。このようにパステルナークはいたるところで一人称「わたし」をまわりの物や風景などでメトニミー的に置き換えている。ヤコブソンが強調したいのは「実際の動作主はいぜんとしてパステルナークの詩的神話の外に留まっている<sup>(51)</sup>。」という点、つまり主体は外部に存在するという点である。

パステルナークの詩や散文に限らず、メトニミーによる表現が優勢な芸術作品においては、主人公の視点が隠されていることが特徴であるという。たとえば、ヤコブソンが挙げている例にしたがえば、チャップリンの「パリの女」における列車の到着のあるシーンでは、列車は見られないが、それが到着したことはそこに写されている人々の反応でわかる。そこではあたかも目に見えない半透明の汽車がスクリーンと観客席との間を進んでいくかのように表現されている<sup>(52)</sup>。

47 ガスパロフによれば、マヤコフスキイとパステルナークの作品におけるメトニミーに基づく表現の数はほぼ等しく、ヤコブソンがパステルナークをメトニミー的表現にすぐれた詩人とする点を誇張だとしている。Гаспаров М.Л. Избранные труды. Т. II. О стихах. М., 1997. С. 406–409.

48 Jakobson, “Randbemerkungen zur Prosa,” p. 421.

49 Ibid., p. 422.

50 Ibid., p. 423.

51 Ibid., pp. 428–429.

52 Ibid., p. 422.

晩年のヤコブソンは妻ポモルスカとの対談で、類似に基づくメタファーは「明白に著者の介入として関心を引く」としたのに対し、近接に基づくメトニミーは「より受身のもので、著者の創造の意志というよりはむしろ、描かれた状況に依拠するもの<sup>(53)</sup>」と端的に述べている。ヤコブソンは、メタファー・メトニミーの見解を介して言語の主体の問題に踏み込んでいる。

#### 2-4. 知覚のフォーカスの移動

しかしヤコブソンは、言語における語る主体や聞く主体の存在を無視して、構造主義的な言語論の展開を試みていたわけではなく、詩論においてもメトニミーにおける主体（詩中の「わたし」）の後退を指摘したのではない。「それは表面的に軽視しているにすぎない<sup>(54)</sup>」のである。ヤコブソンがメタファーよりもメトニミーをはるかに重視したのは、メトニミーにおける主体ないし詩中の「わたし」のありかたに着目していたためである。メトニミー的な意味生成においては、詩中の「わたし」である主体はあたかも側面から眺められるかのような外部に存在し、主体の「わたし」が中心的な位置を占めるのを避ける。詩においても散文においても主人公あるいは語り手から当てられたフォーカスは、それが読まれるとき、読み手のフォーカスに移動する。主人公あるいは語り手によって固定された自己中心的な視点はありえず、主体はつねに知覚する読み手へと移行するものとヤコブソンは考えている。外在的な主体からフォーカスを合わせるメトニミーの表現においては、読み手は主人公あるいは語り手という絶対的な主体から解放され、個々の状況に応じてさまざまな角度から生き生きとした描写を知覚することができる。メトニミーは近接性に基づいて意味に豊かな幅をもたせるだけでなく、固定されない動的な視点を知覚する読み手にもたらすのである。

ヤコブソンはこの非中心的な主体のありかたをメトニミーのなかに見い出したが、こうした見解はコミュニケーション論においても顕著にあらわれている。すでに述べたように、話し手は近接性に基づいて意味を転義させながら語り、聞き手はそこから真意を解釈しなければならない。つまりコミュニケーションにおいて、知覚の主体は、フォーカスをずらした話し手本人からそのずらしを理解する聞き手に移動する。こうした移動はことばの交換を通じて話し手と聞き手が相互に入れ替わることで繰り返される。ヤコブソンは話す立場より聞く立場を主体的と考えるが、その聞く主体もやがては話し手となり、話し手と聞き手は絶えず入れ替わるものである。話し手から聞き手へとフォーカスの移動されたときにメッセージは伝わるものであり、相互の理解にずれが生じるのもこの過程においてである。

このことが、ヤコブソンが1957年に発表した論文「転換子と動詞範疇とロシア語動詞」に顕著にあらわれている。「転換子」とは「いま」・「ここ」・「わたし」というような、状況とともにその意味が変化する語を指し、現代言語学の術語では「ダイクシス（直示）」にあたる。こうした転換子は発せられたときにはじめて指示対象が明らかになる。たとえば、英

---

53 Roman Jakobson and Krystyna Pomorska, “Besedy,” in *S. W.*, vol. 8 (Berlin: Mouton Publishers, 1988), p. 539; ローマン・ヤコブソン（伊藤晃訳）『詩学から言語学へ：妻ポモルスカとの対話』国文社、1983年。

54 Jakobson, “Randbemerkungen zur Prosa,” p. 422.

語の人称代名詞 I はメッセージの話し手を、you は聞き手である二人称を示すという一般的意味を有しているようであるが、実際には I も you もいつも異なる人を指す。また接続詞 but は、前の内容と「反対のこと」という一般的な観念をあらわしているのではなく、発せられた状況によって一回ごとに異なる意味を示す。転換子は語られるたびに、言語の象徴的な意味から解放され、その場かぎりの指示的意味を獲得する。ヤコブソンはこの論文で、メッセージを所与の状況下で分析する必要性を強調している。すなわち、メッセージとコードとの重なり合いに着目し、指示する対象と指標とが「実存的関係にある<sup>(55)</sup>」ことに言及している。ヤコブソンはコードとメッセージの不可分性を確認し、転換子を例に、語が現実世界と結びつきながら意味をシフトさせることを明らかにした。

しかしヤコブソンは、語の意味は用いられる文脈によって異なるというような語用論的思考を明らかにしたのではない。話し手と聞き手が頻繁に入れ替わり、主体が交替するたびに、視点もそのつどシフトする。「わたし」が「わたし」の視点からの時空「いま」・「ここ」を語れば、今度は聞き手であった「わたし」が「わたし」の視点からコンテクストをシフトさせて語る。「わたし」は絶対的な存在ではなく、たびたび変換する揺らぎやすい存在である。ヤコブソンによれば、言語習得の途中にある子どもにとって、話し手から話し手へと移行しうる「わたし」という代名詞の使用は容易ではない。「きみは自分のことをぼくと言ってはいけない。ぼくだけがぼくで、きみはただきみでしかないんだ<sup>(56)</sup>」という具合に一人称代名詞を自分だけに独占しようとするという。聞き手としての他者の存在を認識できずにある子どもは、自己中心的な視点に囚われている。しかし、たびたび交替する一人称「ぼく」の使用を習熟することで、自己を相対化することができるようになる。つまりヤコブソンが言いたかったのは、転換子は聞く主体の存在によって機能し、固定化された絶対的な視点を排除する言語の脱中心化の作用を担っていることである。

また、自己中心的な視点から解放された話し手と聞き手は、「いまここで」という「直接の時間的・空間的状況への依存」から脱却し、語られた状況や時間、空間を経験することができる<sup>(57)</sup>。話し手は自身のいる時間や空間上離れた点で起こることについて語ることができ、また聞き手はその時間的・空間的地点に移動させられる。ヤコブソンは「言語の本質的な力は、……言語がわれわれを時間のなか、空間のなかへ移すことができる点にある<sup>(58)</sup>」とし、言語が繰り広げる時空間上のダイナミズムに着目した。

55 Roman Jakobson, "Shifters, Verbal Categories and the Russian Verb," in *S. W.*, vol. 2, p. 132; ヤコブソン『一般言語学』149-170頁。

56 Jakobson, "Shifters, Verbal Categories," p. 133.

57 これに関しては Charles F. Hockett, "The Origin of Language," *Scientific American* 203 (1960), p. 89 で次のように述べられている。「人間に限られた能力といってもよいことは、会話が行われているところから空間または時間（あるいは両方）的に遠く離れたことについて話すことができることである。この特徴である「移動 "displacement"」は、人間にもっとも近い同類の動物がもつ声のシグナルには絶対にないようである。」

58 Jakobson and Pomorska, "Беседы," p. 493.



## 中心のない全体——結論にかえて

これまで論じてきたように、ヤコブソンは言語に関しては「近接性」に基づいた記号のずらしの性質に注目し、また言語の担い手である主体の問題に関しては、コミュニケーション論で理論的に想定されるような普遍的な主体の存在を拒否し、意味が生産されるたびに入れ替わり立ち代りにあらわれる語る主体と聞く主体に目をつけ、言語においても主体においても中心的な視点を定めることを避けていた。ではなぜヤコブソンはこのようなコミュニケーション論を展開したのだろうか。

聞き手は発せられたメッセージの記号の一つ一つを個別に翻訳しながら理解するのではなく、話し手の発する音から意味へと全体を再構成し、「メッセージ全体」（あるいは発話全体）で理解に至る。ヤコブソンが言う「メッセージ全体」とは記号の単なる集合体ではなく、記号の総和以上のものを指している。意味は記号にあるのではなく、メッセージ全体にあるとヤコブソンは考えていた。

また、そのメッセージを生成する言語の担い手に関しては、「語る主体」という絶対的な存在の一点に焦点を合わせるのではなく、発話のたびに話し手と聞き手が入れ替わることで交互にあらわれる不特定の複数の主体を発話全体から見いだしている。話し手は自己中心的な立場から独白のように語るのではなく、話し手自身も聞き手として理解する側の役割を経験することで、次に話し手になるための条件を得、再び語ることができる。一人の話し手が主体となってコミュニケーションを形成するのではなく、話し手と聞き手が役割の交替を繰り返すなかで、一つのコミュニケーションを達成する。ヤコブソンは、話し手と聞き手という主体が交互に織り成す階層的なコミュニケーションを統一的に捉えようとしていた。

ヤコブソンの言語論には、中心を置かずに全体として統一的に言語現象を捉える傾向がある。たとえば、言語変化を観察した1930年の論文「史的音韻論の諸原則」において、「個々の音韻論的事実の一つの部分的全体として扱われるが、この部分的全体もまた様々な度合いで上位にある他の部分的集合体に結びついている<sup>(59)</sup>」と述べ、部分的な音韻変化を個別に捉えるのではなく、変化をこうむる体系全体を考慮に入れる必要性を終始強調している。この見解は部分と全体との相関性、関係性を基本とした言語の体系、構造の概念を含んでいる。一般にヤコブソンが「全体」の見解を導き出すのは、以上のような言語体系および構造を分析するときのことが多い。ヤコブソンは言語構造に関して「言語の比類ない柔軟性の根本は、それぞれ別々に構造化された幾つものレベルが相互に結合し、整然と積み重ねられているところにある<sup>(60)</sup>」とし、言語を一つの完結した構造としてではなく、「変換可能な」よりダイナミックな階層体として考えていた。ヤコブソンの言語構造観は「全体と部分の多層的階層<sup>(61)</sup>」を

59 Roman Jakobson, "Principes de phonologie historique," in *S. W.*, vol. 1, p. 202; ヤコブソン『ロマン・ヤコブソン選集1 言語の分析』11-30頁。

60 Roman Jakobson, "Verbal Communication," in *S. W.*, vol. 7, p. 88; ヤコブソン『ロマン・ヤコブソン選集2 言語と言語科学』53-66頁。

61 Roman Jakobson, "Parts and Wholes in Language," in *S. W.*, vol. 2, p. 281; ヤコブソン『ロマン・ヤコブソン選集2 言語と言語科学』25-30頁。

基本としているのである<sup>(62)</sup>。

ヤコブソンがコミュニケーションを考える上で言語と主体の両面で「脱中心化」の見解を出したのも、ヤコブソンに特有の以上のような「全体性」という考えかたが念頭にあったためである<sup>(63)</sup>。ヤコブソンはコミュニケーション構造を「スピーチ・イベント」としてさまざまな因子が階層的な統一体をなすものと考えている。本稿で主に論じたのはコードと話し手・聞き手の主体の問題に限られるが、コミュニケーションにおいて、話し手、聞き手、コンテクスト、コード、接触、メッセージの六つの因子が、それぞれが唯一の因子ではなく、複数の下位単位を抱えながら、有機的に結びついて一つの「全体」をなしている。ヤコブソンはこうした複数の因子のうちのどれか一つが支配的因子となって作用すると考えるのではなく、複数の因子が重なり合いながらコミュニケーションを生成していくプロセスを全体的に捉えていた<sup>(64)</sup>。

とはいえ、ヤコブソンの考える「全体性」は、解釈学的循環のように理解の構造を個は全体から、全体は個から捉えるという、個と全体という対立に立脚したものではない。ヤコブソンはコミュニケーションに関して、繰り返し得ないものの反復性を見だし、「構造」という概念に回収できない「全体」という概念を想定したのである。「話すという出来事」はその場一回限りのもので、話し手にとっても聞き手にとってもはじめてのものであるにもかかわらず、話し手も聞き手も理解し合えるのは、「話すという出来事」が言語の脱中心化の作用によって全体で捉えられるためである。言語は個々の因子において一点に集中化せず、その周縁において作用することが可能なコミュニケーション・ツールである。

ヤコブソンは一般に構造主義的言語研究の先駆者の一人とされるが、言語現象の具体性を捨象し関係性の抽出にのみ専念し、主体を消去して、一つの完結した言語構造の構築をめざしていたのではない。コミュニケーションにおいて、さまざまなレベルで「多層的階層」関係が成り立っていると考えていた。「言語は孤立し密閉した全体と解釈することができず、全体としても部分としても同時に見なければならぬ<sup>(65)</sup>」というヤコブソンの主張がコミュニケーション論からも明らかになった。

62 拙論（「ヤコブソンの「言語連合」をめぐって：言語の「全体性」『ロシア語ロシア文学研究』39号、2007年、18-25頁）では、「言語連合」なる概念を通じて、ヤコブソンが「構造」とは異なる「全体性」という視点から言語を捉えていたことを論じている。

63 シュライフェルによれば、「全体」の概念はヤコブソンのほかに、ベンヤミンの「アウラ」、パフチンの「ジャンル」の考えかたにもみられるという。（*Шлайфер Р. Обобщающая эстетика жанра: Бахтин, Якобсон, Беньямин // Вопросы литературы. 1997. № 2. С. 76-100.*）

64 第1-3節におけるパースとの比較でいえば、パースによる記号の三分法に関しても、ヤコブソンは「パースは記号をこれら三つの分類のいずれかに決して閉じておいていない。これらの区分は単に三つの分類にすぎず、三つとも一つの記号に共存しうる。“記号のうちでもっとも完全なのは、類似、指標、象徴の三つの性質が、できるかぎり等分に混ざり合った記号”である」とし、記号も「ひとつの統合体」、「全体」として認識することを主張している。（Jakobson, “A Few Remarks,” p. 253.）

65 Jakobson, “Parts and Wholes,” p. 282.